様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 20 日現在

機関番号：30123
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008 ～ 2012
課題番号：20520298
研究課題名（和文） 現代ロシア文化におけるスターリニズム表象とその起源

研究課題名（英文） Stalinism images and its origin in contemporary russian culture

研究代表者
岩本和久（IWAMOTO KAZUHISA）
稚内北星学園大学・情報メディア学部・教授
研究者番号：40289715

研究成果の概要（和文）： 本研究では 1960 年代以降のロシア文学に見られるスターリニズム表象の系譜について、リアリズムとポストモダニズムの間で揺れる現代ロシア文学の変化を参照しながら検討した。また、それら文学作品が 21 世紀のロシアにおいてテレビ・ドラマ化され、新たに神話化されていく様を検討した。それらを通し、現代ロシア文化におけるスターリニズム表象の志向として､悲劇の告発とユートピアの賛美という対立する要素を明らかにした。

研究成果の概要（英文）： In this research, we have compared the tradition of the representation of Stalinism in Russian literature after 1960's with the changes of contemporary Russian literature, which is revolving around realism and postmodernism. We also analyzed mythologisation of literary works about Stalinism in TV serials in 21th century Russia. As a conclusion of the research, it was revealed that representations of Stalinism in contemporary Russian culture have dichotomous intentions: exposure of tragedy and admiration of utopia.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
2008 年度	700,000	210,000	910,000
2009 年度	700,000	210,000	910,000
2010 年度	700,000	210,000	910,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
2012 年度	700,000	210,000	910,000
総 計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野： ヨーロッパ文学（英文学を除く）
科研費の分科・細目： ロシア東欧文学
キーワード： ソヴィエト、ロシア、外国文学

１．研究開始当初の背景

粛清や第２次世界大戦などの悲劇を伴うスターリン時代への関心は、特に 1991 年のソ連解体前後から世界的に広く見られるようになった。

現代ロシア文化においてスターリン時代が参照される場合、ソヴィエト文化のパロディー化と考えられたり、「レトロ趣味」とみなされたりすることも多い。とはいえ、それらスターリン時代に関する表象の起源を遡るならば、ペレストロイカ期の「歴史の見直し」、さらにはブレジネフ時代にソルジェニーツィンらによってなされた反体制文学に至ることになる。

本研究は現代ロシア文化における過去への眼差しを通して、ソヴィエト文化と現代ロシア文化の連続性と差異を探ろうとするものである。

２．研究の目的

本研究は 1960 年代末から現在までの間にロシアでなされたスターリン時代を題材とする表象を分析し、その時代ごとの変化や諸傾向、影響関係が明らかにするものである。

文学的テクストを主な研究対象とするが、映画や美術、テレビ・ドラマといった視覚的な文化についても、散文テクストとの相互関係を含め、必要に応じて検討する。

それぞれのテクストについて主題やモチーフ、スターリン時代に対する様々な視点や解釈を分析し、スターリン時代のイメージの形成過程や構造を明らかにする。また、それらのテクストがロシア社会においていかに受容されたかについても検討し、その機能を明らかにする。さらには、先行する時期の古典的作品群や最新の文学テクストとの間の影響関係を考察し、ソヴィエト文化と現代ロシア文化の継続性と差異を明らかにする。

こうした作業により、スターリン時代のイメージ体系の系譜と、現代ロシア文化におけるその機能を明らかにし、「スターリン時代の神話」を同時代の文化現象として明確化する。

３．研究の方法

（１）国内に存在する資料の収集と分析：国内に存在する 1 次資料、2 次資料に接し、その分析を行う。

（２）国外に存在する資料の収集と分析：国内で入手困難な資料については、ロシア国立図書館（モスクワ）で調査を行う。

（３）新たに刊行された資料の収集と分析：　海外で刊行された文学作品、映像作品、最新の研究について文献や DVD を収集し、その分析を行う。

（４）海外の現地調査：　海外での調査を行い、博物館展示の現状や作品に描かれた空間について分析する。

（５）研究会の開催：　札幌などで研究会を開催し、特に若手研究者との連携、情報交換をはかる。

（６）中間成果の発表：　ホームページを開設し、研究の進行状況を随時、公開する他、中間成果を日本ロシア文学会研究発表会などの場で発表する。

４．研究成果

本研究では 1960 年代から現在までのスターリン期の表象の系譜を再検討し、現代ロシアにおけるその在り方を特徴づけたが、具体的には以下のような作業を行っている。

（１）文学作品の再検討：　ソ連期から活動してきた作家のうち、特にソルジェニーツィン、アクショーノフ、アイトマートフが生涯の最後の時期に行った活動について再検討した。また、ペレーヴィン、パヴロフ、テレホフ、カチショノク、イリチェフスキイ、ヘムリンら最新のロシア文学作品について、収集と分析を行った。これらを通し、ソルジェニーツィンに代表される「悲劇の告発」、アクショーノフに代表される「ユートピアへの驚嘆」というスターリニズム表象の二つの志向とその系譜を確認した。

（２）テレビ・ドラマの分析：　アクショーノフ『モスクワ・サガ』、ソルジェニーツィン『煉獄の中で』、ルイバコフ『アルバート街の子どもたち』、あるいはシャラーモフの作品にもとづいて 21 世紀のロシアで製作されたテレビ・ドラマの分析を行い、こうしたスターリン期の表象が現代ロシア社会で神話化されていく過程（視聴者の世代、映像表現の特徴）を明らかにした。

（３）博物館展示の分析：　現代社会におけるスターリン期の視覚的展示の在り方を考察するため、ロシアの諸都市とカザフスタン、アメリカにおいて現地調査を行った。訪問先としては、収容所博物館（モスクワ）、政治史博物館（ペテルブルグ）、サハリン州郷土博物館（ユジノサハリンスク）、カルラーグ博物館（カラガンダ）、エキバストゥス郷土史博物館（エキバストゥス）、ラトガース大学美術館（ニューブランズウィック）である。これらを通じて、収容所が公的に神話化されていく過程と、そこで語られている内容の特徴を明らかにした。

（４）作品空間の現地調査：　トリーフォノフ、ソルジェニーツィン、パヴロフについて、その作品の舞台となった場所を訪問し、文字テクストの細部を確認した。具体的な訪問先はモスクワ、ロストフ・ナ・ドヌ、チューリヒ、エキバストゥス、カラガンダである。モスクワの「川岸の館」博物館ではトリーフォノフの作品空間の保存の現状を、カラガンダではかつての収容所の現状を確認した。チューリヒ、ロストフ・ナ・ドヌ、エキバストゥスへの訪問は、ソルジェニーツィンのテクストについての都市論的、空間論的な分析を行うための準備作業となった。

（５）研究会の開催：　2008 年度から 2011 年度まで、北海道大学で 4 回の研究会を開催

した。研究代表者である岩本和久の他、前田しほ、佐藤亮太郎、梅村博昭、大川良輔、佐藤仁美、宮風耕治、松下隆志が発表を行っている。研究会を通して、スターリン期の表象の重要な主題として「収容所」だけでなく「戦争」を挙げられること、ポストモダニズムとリアリズムの間で揺れる現代ロシア文学の現状、ペレストロイカ期の言説の重要性などが確認された。

（6）学会報告：　ポストモダニズムとソ連期の文学の関係について、2008 年に日本ロシア文学会で報告を行った（「ヴィクトル・ペレーヴィンと『収容所群島』」）。ソヴィエト解体 20 年にあたる 2011 年には、日本ロシア文学会のワークショップ「いま、ソ連文学を読み直すとは」において現代ロシア社会におけるソヴィエト文学の受容について、JSSEES（日本スラヴ東欧学会）のシンポジウム「ソビエト崩壊の 20 年」において現代ロシア文学の諸動向について報告を行ったが、それらは本研究の独自性とアクチュアリティを反映するものである。ソルジェニーツィンのテクストの分析結果は、モスクワにおける国際会議「アレクサンドル・ソルジェニーツィンの人生と創作」の報告として採択されたが、これも一定の国際的評価を示すものと言えるだろう。

（7）刊行物：　2011 年の日本ロシア文学会でのワークショップは、埼玉大学より書籍として刊行された（『いま、ソ連文学を読み直すとは』）。研究会での報告は研究全体の総括と併せ、2 冊の報告集として刊行しているが（『戦争と異世界―現代ロシア文学とスターリニズム』、『現代ロシア文学とスターリニズム（II）』）、これはスターリニズム研究の観点からのみならず、現代ロシア文学の研究としても先駆的なものと考えられる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5 件）
① Kazuhisa Iwamoto, Russian Literature in the Post-Soviet Period: A Japanese Viewpoint, *Japanese Slavic and East European Studies*, 査読有, Vol.33, 2012, 37-46.
② 岩本和久、AES+F 論、ユーラシア研究、査読無、44 号、2011、38-43。

〔学会発表〕（計 5 件）
① Кадзухиса Ивамото, Ленин и Солженицын: идентификация героя с автором, 国際学術カンファレンス「アレクサンドル・ソルジェニーツィンの人生と創作」, 2011 年 12 月 8 日, アレクサンドル・ソルジェニーツィン記念在外ロシアの家（ロシア）.
② 岩本和久、ポスト・ソヴィエトのロシア文学、JSSEES シンポジウム「ソビエト崩壊の 20 年―生活の変化, 思想の変容」、2011 年 10 月 23 日、東京国際大学。
③ 岩本和久、現代に生きるソヴィエト文学、日本ロシア文学会研究発表会ワークショップ「いま, ソ連文学を読み直すとは」、2011 年 10 月 9 日、慶應大学。
④ 岩本和久、ヴィクトル・ペレーヴィンと『収容所群島』、日本ロシア文学会研究発表会、2008 年 10 月 11 日、中京大学。

〔図書〕（計 6 件）
① 岩本和久、松下隆志、前田しほ、稚内北星学園大学、現代ロシア文学とスターリニズム（II）、2013、47（1-12）。
② 野中進、安井亮平、中村唯史、岩本和久、平松潤奈、埼玉大学、いま、ソ連文学を読み直すとは、2012、90（67-78）。
③ 前田しほ、佐藤亮太郎、宮風耕治、岩本和久、稚内北星学園大学、戦争と異世界―現代ロシア文学とスターリニズム、2011、70（59-67）。
④ 岩本和久、東洋書店、情報誌の中のロシア、2008、63。

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
① http://www.wakhok.ac.jp/~iwamoto/stalinism_now/

② 岩本和久、カザフスタンの日本人強制収容所は今、北海道新聞、2013 年 1 月 18 日夕刊、5 面（研究の一部の紹介）

６．研究組織

(1)研究代表者

岩本和久（IWAMOTO　KAZUHISA）

稚内北星学園大学・情報メディア学部・教授

研究者番号：40289715

(2)研究分担者

（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

梅村博昭（UMEMURA HIROAKI）

東京農業大学・生物産業学部・講師

研究者番号：